【論文】

InterProfessional Education の意味と可能性
―専門職／専門職教育者の新たな学び―

渡邊 洋子

What is InterProfessional Education？
; Mutual Learning of Professionals and Educators of Professional Education

WATANABE, Yoko

本稿は、専門職教育者、すなわち専門職教育を担当する教育者が、職場を離れてインフォーマルな場で、異なる職種・業種の専門職教育者と語り合い学び合うことが、どのような意味と可能性をもつか、という問いにアプローチするものである。

ここでの専門職とは主に、①従来「古典的専門職」と呼ばれてきた医師や法曹などに加え、その養成課程が高等教育の一環に位置づけられている、②職場で系統的・組織的な研修の取り組みが行われるような、高度な専門職性を伴う職業人を指す。また、ここで注目する専門職教育者とは、専門職の養成・研修等に「教員」「講師」等、教育者として関わる人たちのことである。

1　現代的背景

現代の専門職は、ショーン Schön,D も指摘するように、自らの専門性を発揮すべき現場や対象が、高度に複雑化する中で、ますます緊要で切実な課題に直面するようになった。そこでは例えば、チーム医療に顕著に見られるように、一つの仕事や課題を遂行するために異なる職種・業種の専門職がチームを組んで連携・協働する機会や場（InterProfessional Work）が、確実に増えてきている。

とはいえ、全体としてみれば、教育や仕事の現場は大枠として、このような課題やニーズに対応できているとは言い難い。具体的な問題は、次の二点に集約される。

第一に、高等教育機関の専門職課程では、高度に専門分化する先端領域の発展が最優先されており、このような視野の広がりや多様性をともなう事態や社会的ニーズへの対応は、一部の先駆的な取り組みを除き、全体としては、単一職種・業種に限定されたカリキュラムや教育活動に特化する傾向が強いという点である。

第二に、専門職領域には各々、異なる価値観や実践的な諸原理、「専門職文化」が構築されている。異なる専門職同士では、これらの「違い」の存在を漠然と感知していたとして

も、具体的に知り合う機会がないために、「ともに仕事をする」場面になった場合の「ハードル」が高くなりがちである。また、多くの専門職が、常に自らの「専門職文化」の中で同職種・業種の人々と一緒に仕事をしているため、自らの職域の価値観、諸原理、「専門職文化」の存在を自覚したり、相対化・言語化したりして捉えることに慣れていない。これらの状況が、「他文化」の専門職との協働を煩瑣なものと受け止めさせるものと思われる。

ここでいう「専門職文化」とは、①その専門領域の特色として一般に知られている「目に見える」職業的な様相にのみならず、②自明視され身体化された広範な諸価値をも含むものである。②は主に、「内」に属する人たちにとっては、「当たり前」のものと受け止められているが、「外」から見るとその職業領域に独特の言語表現、行動様式、慣行や所作などを指す。ブルデューの言う、ハビトゥスのようなものである。この「専門職文化」土壌については、たとえ隣接領域にあっても、相互の「違い」を学び、共有する機会が、現状においてはほとんど存在しない。多職種・異業種での協働を求められる現代の諸局面においては、このような状況が、無用な抵抗感や齟齬、諸問題を生じさせる素地となりかねない点が、現代的課題の一つと言えよう。

本稿ではこれらを踏まえ、IPE とは何かについての定義を確定した上で、IPE をいくつかの種類に分類し、各 IPE の目的と特徴を整理する。その中で、専門職教育者交流型 IPE に注目し、専門職養成を共通基盤とする多職種・異業種の教育担当者にとって、IPW を必ずしも前提としない交流型 IPE の存在意義がいかなるものかを明らかにし、そこでの実践課題の共有と交流方法などに関わる具体的な可能性を検討したい。

2　IPE とは何か

IPE は現在、チーム医療に向けた学部・現職教育から、ビジネスに新たな発想を生み出す場として活用されている。IPE は近年、医療・保健・福祉領域では「多職種連携教育」、企業内教育では「異業種間教育」等の訳語を当てられることが多いが、使われる場面によって各々のニュアンスが異なり、定訳は現時点では存在しない。それと連動して、IPE の定義も一定しているわけではない。それゆえ、本稿では敢えて、訳語をあてずに IPE を用い、以下のような定義を用いることとする。

本稿における IPE とは「ある目的の達成を、より効果的で容易なものとするために、異なる職種・業種の専門職に携わる人々が、互いの専門職領域の特性、仕事の段取りや進め方、専門職文化、課題などを共有し、それをもとに相互理解をより深め、より円滑なコミュニケーションの構築を通して実践コミュニティに貢献する、相互学習支援活動」を指す。

これまで「IPE」と一括して捉えられてきた諸活動について、筆者は図 1 のように分類・整理されるものと考える。以下、これを筆者自身の見解にもとづいて説明したい。

まず、IPE は大別して、「IPW 直結型 IPE」と「多職種／他業種交流型 IPE」に分けられる。前者は文字通り、IPW と直接に結びついた IPE 活動、つまり「より円滑かつ効果的

に、ともに働くための IPE」であるのに対し、「多職種／他業種交流型 IPE」は、「交流により多元的・客観的な視点を得るための IPE」と言えよう。以下、両タイプを見ていく。

図表１　IPE のカテゴリー（筆者作成 ）

Ⅰ　IPW 直結型 IPE
Ⅰa 「手術室」型 IPE
Ⅰb 「地域医療」型 IPE
Ⅱ　多職種／他職種交流型 IPE
Ⅱa　ビジネス交流型ＩＰＥ
Ⅱb　専門職教育者交流型ＩＰＥ
Ⅱc　他の目的のためのＩＰＥ

(1) 「IPW 直結型 IPE」

まず、「IPW 直結型 IPE」は、現在または将来的に、実際に現場で協働する（可能性のある）多職種・異業種の専門職者／学生同士が、設定されたテーマに関わる課題解決に共同で取り組み、その中で協働場面に必要な知識やスキルを体得し、相互理解への手がかりを得ることを目指すものである。IPE 活動を継続することによって、IPW にむけた資質・能力や態度などが培われることが期待される。IPW は、医療であれば「医療関係」という単一業種の中の複数の職種が関わることが多いために、このタイプでは、異業種よりむしろ、多職種による IPW／IPE が主流になると言えるだろう。

「IPW 直結型 IPE」には、下位タイプとして「手術室」型 IPE と「地域医療」型 IPE がある。「手術室」と「地域医療」は医療関係の言葉であるが、ここでは比喩的・便宜的に用いており、「IPW 直結型」IPE が、医療領域に限定されることを意味するわけではない。

①　「手術室」型 IPE

「手術室」型 IPE とは、「限られた条件の中で特定の仕事の達成を目的にチームで協働する」という集約型の IPW を想定した IPE を指す。すなわち、多職種の専門職たちが、ある時間帯（「手術中」）・ある場所（「手術室」）で、ある課題（「手術」）の達成のために、各々の専門性を最大限に発揮しつつ、協力しながら目的（｛手術の成功｝）に向けて協働するという集約型の IPW が前提とされている。同じ時間と空間を共有し、臨場感あふれる現場で、緊密な意思疎通と事態に即応した判断や合意、柔軟でタイミングのよい連携などが求められる。ゆえに、IPE もそのような IPW の仕事場面を想定した内容構成が必要とされる。

②　「地域医療」型 IPE

他方、「地域医療」型 IPE とは、「患者やクライアントの問題解決・状況改善やニーズの充足に向けて、目的の設定やプラニングも含めて協働し、各自が自らのパートを担う」という分散型の IPW を想定した IPE を指す。すなわち、ある問題を抱えた対象者（「患者」「クライアント」など）への中長期的な対応（「ケア」「自立支援」「問題解決」など）のために、多職種（・異業種）の専門職が、互いの専門性を持ち寄って具体的プラン（「治療計画」「ケアプラン」「取り組み表」など）を作成し、その達成（最終的な問題解決・

改善）に向けて最も適切な連携方法を決定した上で、各々が自分の持ち場で日々そのパートを担う、という分散型の IPW が前提となっている。各々の専門職は、自らの時間や空間と専門性において対象者と関わり、最終的な問題解決・改善への具体的プランを、時間・空間を超えたところで協働的に達成することを目指す。IPE では、そこに向けた地道な記録の共有化や情報交換の技法、相互理解やオープンな関係性づくりに向けた様々なトレーニングが肝要となろう。

(2)「多職種／他業種交流型 IPE」

「多職種／他業種交流型 IPE」の下位タイプには、「ビジネス交流型 IPE」「専門職教育者交流型 IPE」「他の目的のための IPE」の３つがある。「ビジネス交流型 IPE」は、企業の管理職や意欲的なビジネスマンが、新たなビジネスチャンスの開拓と自己投資に役立てるべく、新奇な発想や多様な視点、さらに広範な人脈を得るべく参加するもので、ビジネス書の読書会や異業種との名刺・情報交換会などがある。「専門職教育者交流型 IPE」は、筆者たちが現在、最も注目している活動で、次節で取り上げるものである。「その他の目的のための IPE」は、例えば、ビジネス目的や専門職教育者としての自己研鑽以外に、個人の自己啓発を主目的に、多職種・他業種の専門職との交流機会に参加する場合などを指している。

３　専門職教育者にとっての IPE

現在、専門職教育の多くは領域別の「縦割り」で行われている。その中で、専門職教育者（高等教育機関で専門職教育に従事している教育担当者）の多くは、専門領域の知識や技術（「何を教えるか」）には一定の専門性を獲得している。とはいえ、その知識・技術を「どのように教えるか」「学びをどう促進するか」に関わっては、教育学の専門的素養に乏しく、「経験知」と試行錯誤に依拠したまま、授業や学生指導に取り組んでいるのが実状である。例えば、医学教育においても、数年前から「医学教育専門家」の認定に向けて学会レベルで取り組みを始めているが、認定制度の立ち上げには多くの議論と労力とを要しており、歯学教育、薬剤師教育に至っては、そのような取り組みはまだ見られない。

近年、多様な領域の専門職教育者に共通に取り上げられる課題は、「安心して現場に送り出せる学生をどう教育するか」「新人をやめさせずに育てるにはどうすべきか」等の問いに見られる、学生や新人の育成に関わるものである。異なる分野の専門職教育者の間には、このような共通課題があっても、それを横断的に捉えて自らの現状を客観的に捉え直し異なる角度から点検する機会や、互いに情報・意見を交換する中で新たな視点や問題解決のヒントを見出せる場は、ほぼ存在していない。筆者はそれゆえに「専門職教育者交流型 IPE」の存在意義があると考えている。

「専門職教育者交流型 IPE」（以下、交流型 IPE）とは、多職種／異業種の専門職教育

者が何らかの形で集い、実践者として共通に直面している教育的・実践的課題について、お互いの経験や考えを分かち合い、同時に、実践研究者として協働で探究する活動である。このような IPE 活動に参加することを通して、専門職教育者は、①専門職としての自己の経験や価値観の振り返り、②教育者としての自己の経験や価値観の振り返り、という二つの側面から、自らの教育実践を省察することができると思われる。

このうち、①の振り返りにおいては、他の専門職領域の参加者とは「異なる」点への着目が中心となる。すなわち、自らの専門職領域の独自性・特殊性、「専門職文化」の特徴を認識し、その専門職世界とその実践コミュニティに身をおく専門職者としての自覚に至るような、振り返りである。

また②の振り返りにおいては主に、他の専門職領域の参加者と「共通する」点が注目される。すなわち、相互研鑽や後継・次世代の専門職育成に向けた「教育を担う者」として、互いの経験や悩みなどを伝え合い分かち合う中で、客観化・言語化の作用が促される。そのプロセスで「学習者」認識や「学習支援者」としての自己認識が問い返され、専門職教育者としての新たな認識枠組への手がかりを得ることが可能になると考えられるのである。

なお、以上については、まだ仮説の域を出ておらず、今後のアクションリサーチ的な取り組みによって、実証・検証する必要がある。

4　おわりに代えて

筆者は、2011 年 3 月初旬の英国サリー大学名誉教授 Peter Jarvis 氏を迎えての専門職教育者を対象とする交流型セッションの開催を基点とし、科学研究費補助金・萌芽研究「専門職教育と専門職性に関する異業種間比較研究―成人教育学の観点から」（H23~H25：研究代表者　渡邊洋子）の助成を跳躍台として、交流型 IPE の「場」の形成と活動方法の探究に、共同で取り組んできている（本誌の柴原「活動報告」を参照）。

私たちが現時点で対象としている専門職教育の領域は、医師・医療者（看護師・理学療法士など）養成、企業内教育、現場型行政官教育（海上保安官養成等）、教師・保育士養成、社会教育関連専門職（学芸員・社会教育主事・図書館司書）養成、法律家養成、学術的研究者養成などである。この交流型 IPE においては、専門領域の壁を越えた個々の実践経験の共有化、実践的課題の抽出、それに関わる意見交換、共通リソースによる議論、それらを共有化するためのインターネット・サイトの活用などが実験的に行われてきた。

これらの方法論はまだ試行錯誤の途上にあり、将来的な「領域横断型専門職教育プログラムの開発」という観点からすれば、まったく未熟なものである。これらに共同のアクションリサーチを合わせた複合的なアプローチを続けながら、InterProfessional という新たな専門職／専門職教育者の学びの可能性を追求していきたい。

≪参考文献・資料≫

Hammock,,M, Freethk,D.S.,Goodsman,D.,and Copperman,J.,*Being InterProfessional ,* Polity, 2009,.

Schön,D., *The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action,* London: Temple Smith, 1984 （ドナルド・ショーン『省察的実践とは何かープロフェッショナルの行為と思考』、柳沢昌一・三輪建二監訳、鳳書房、2007 年)。

ピエール・ブルデュー『実践感覚 I 』、今村仁司・港道隆 訳、みすず書房、1988 年。

エティエンヌ・ウェンガー他著『コミュニティ・オブ・プラクティス―ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』櫻井祐子他役、翔泳社、2002 年。

Jarvis, P. *The Theory and Practice of Teaching*, Routledge, 2006.（ピーター・ジャーヴィス編著『生涯学習支援の理論と実践―「おしえること」の現在』、渡邊洋子・吉田正純監訳、明石書店、2011 年） 他。

付記：本稿は、2013 年 8 月 31 日に関西大学において開催された日本学習社会学会研究大会自由研究発表での報告内容をもとに、大幅に加筆・修正したものである。